“郡衙”ってなあに？

今日国のさまざまな機関や役所を官庁といいますが、古くは官衙とよばれました。飛鳥時代から平安時代に、地方の行政区として国（今の県にあたります）の下におかれたのが郡で、その役所が古代郡衙です。恒川遺跡群は、古代伊那郡衙の跡として早くから注目された重要な遺跡です。国道153号のバイパス建設の時に発掘調査がはじまり、現在も国の補助金をもらいながら、郡衙の範囲やその姿を明らかにするための確認調査が行われています。

なぜ座光寺に古代の役所が置かれたの？

５世紀中頃、座光寺は松尾地区とともにいち早く馬にかかわる文化を受け入れ、古墳を造りはじめた地域であることが明らかになってきました。それは、中央の大和王権との結びついたことにはじまります。そして、その関係をしだいに強めていった結果、座光寺に郡衙が置かれたと考えられます。

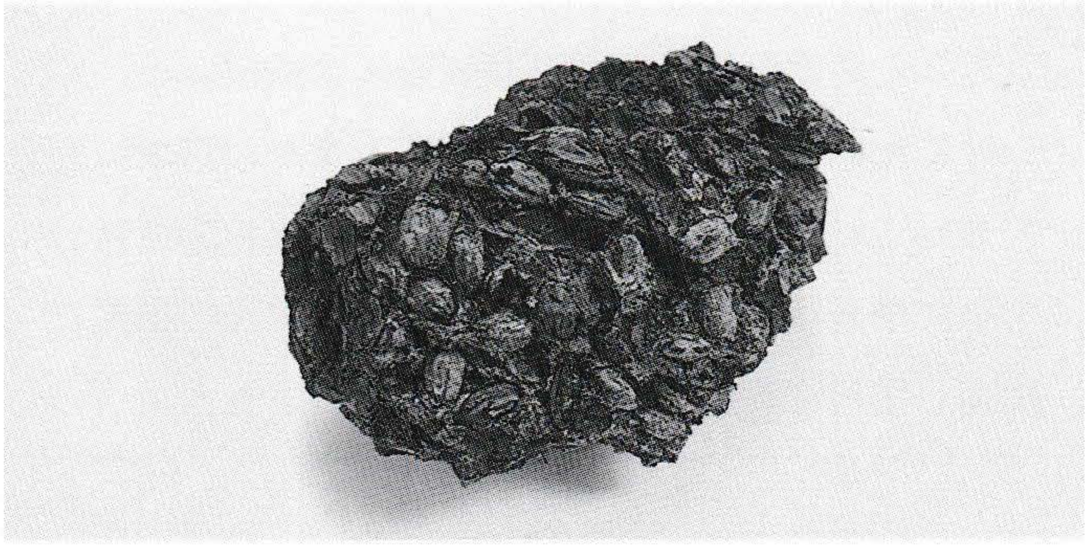
昔の役所の姿

郡衙は、まわりを溝や土塁で区切られ、政治を行う政庁、税をおさめた正倉、国司などが泊まる館、役人たちの食事をまかなった厨家、伝馬のための馬をかった厩などからできています。また、近くには郡寺とよばれる寺がありました。恒川遺跡群の場合、高岡のお薬師様東側に正倉群、バイパス付近に館か郡衙に関連した建物があったことが分かってきました。

正倉は、整然と並んで建てられており、はじめは地面に掘った柱穴に直接柱を立てた建物でしたが、奈良時代の中ごろには礎石をすえてその上に建物が建つものにかわりました。正倉が見つかったところでは焼けた米が出土していて、何度も火事で倉が焼けたことが分かっています。

正倉－掘立て柱の建物跡

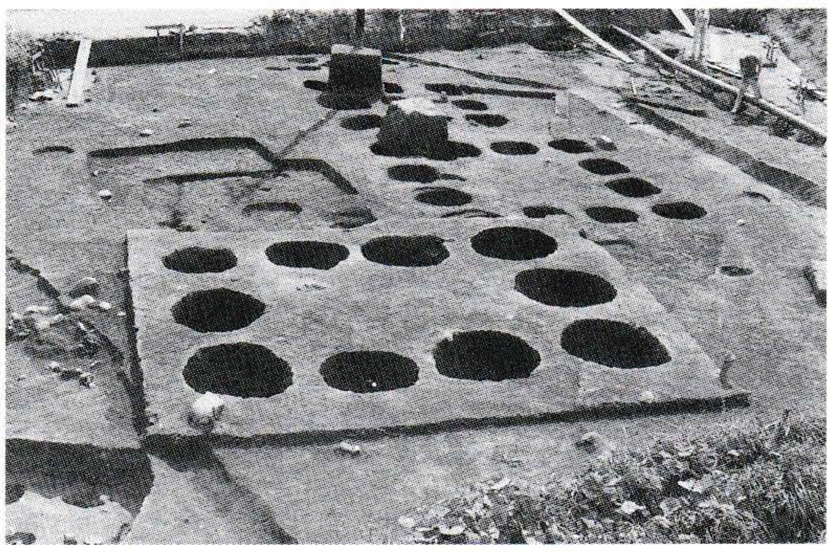
正倉－礎石をもつ建物跡



焼けた米

館－新屋敷地籍の掘立て柱の建物跡

「厨」の文字が書かれた灰釉陶器



恒川Ｂ地籍の掘立て柱の建物跡

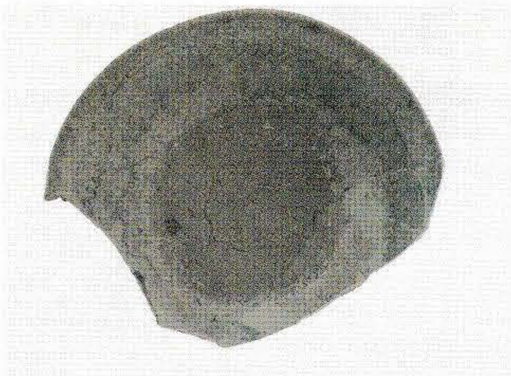
役人たちの生活の様子

官人とよばれる役人たちは、役所では机にむかい墨・筆・硯などを使って文書を作ったり、納められた税を正倉に収めたりするのが仕事でした。

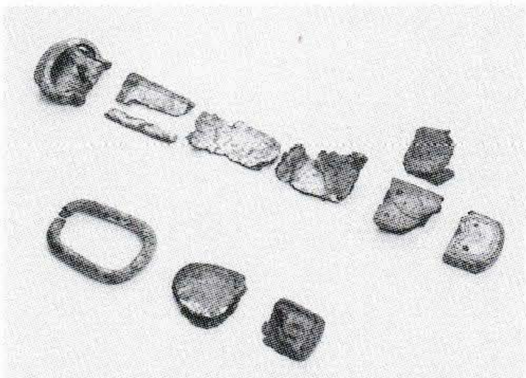
恒川の田中・倉垣外地籍や恒川清水の東側では、こうした役人たちの住まいの跡が見つかっています。上級の役人たちは金属製品や三彩・緑釉・灰釉とよばれるうわぐすりをかけて焼かれた陶器を、位が低くなると須恵器や土師器とよばれる焼き物を食器などとして使っていました。

緑釉陶器

須恵器と土師器

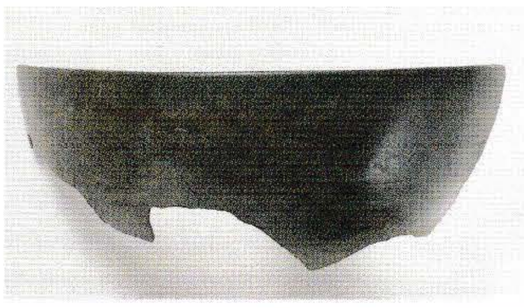


灰釉陶器

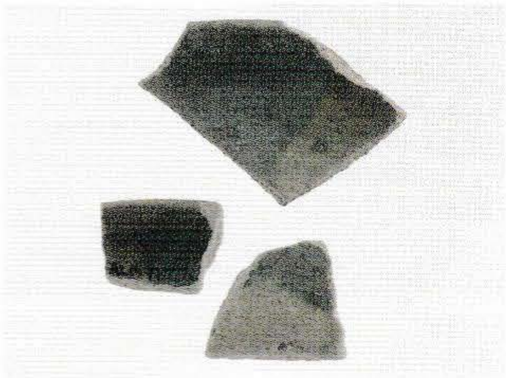


腰のベルトにつけた金具

恒川遺跡群から出土した硯

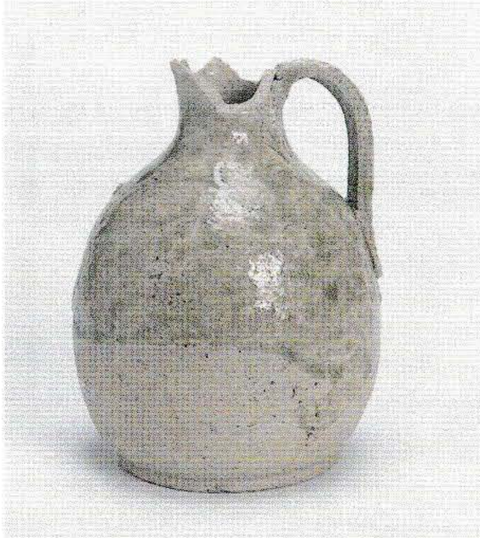


銅鋺（参考：川路辻前遺跡）

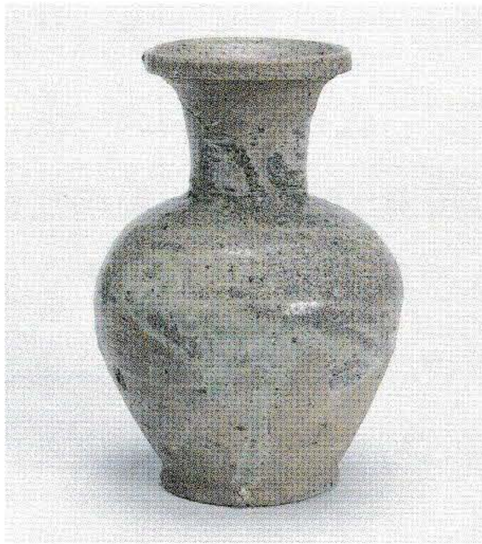


三彩陶器

役人たちが亡くなると、火葬されて蔵骨器におさめられ、高岡の新井原・石行遺跡の墓地に葬られました。新井原・石行遺跡では、白鳳時代（645年から710年の間）に作られ金メッキされた押出仏が出土しています。ここにはお堂のような建物があったようで、野辺の送りがされたと考えられます。



蔵骨器ー灰釉陶器の壷

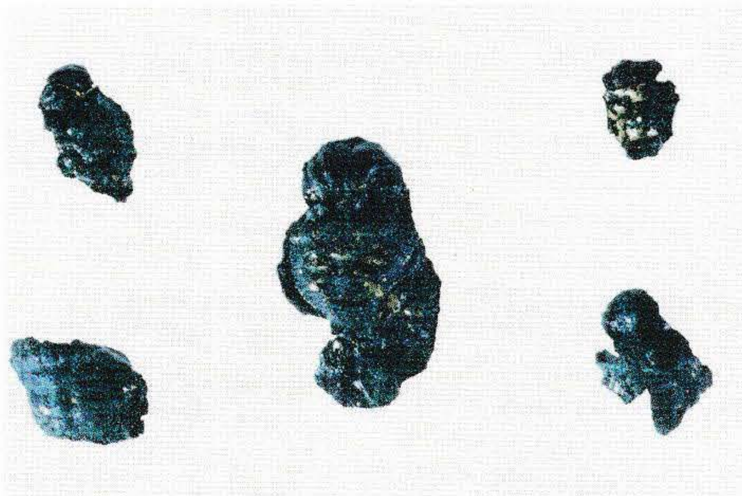


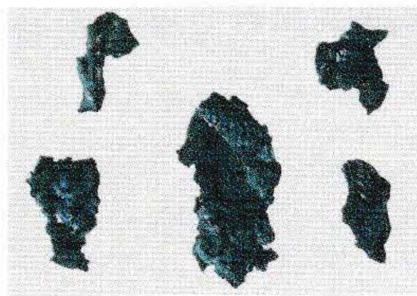
墓に副葬された灰釉陶器の瓶類

豆知識

押出仏

レリーフ状の型の上にうすい銅板をおいて、文様を鎚とたがねで打ち出したもので、金メッキされています。７世紀の終わりから８世紀のはじめ頃作られたもので、打ち出しが丁寧で失敗による穴がほとんどなく、平均して薄く仕上げられていることから、非常に優れた品ということができます。お寺の堂の中を飾ったりするのに用いられました。



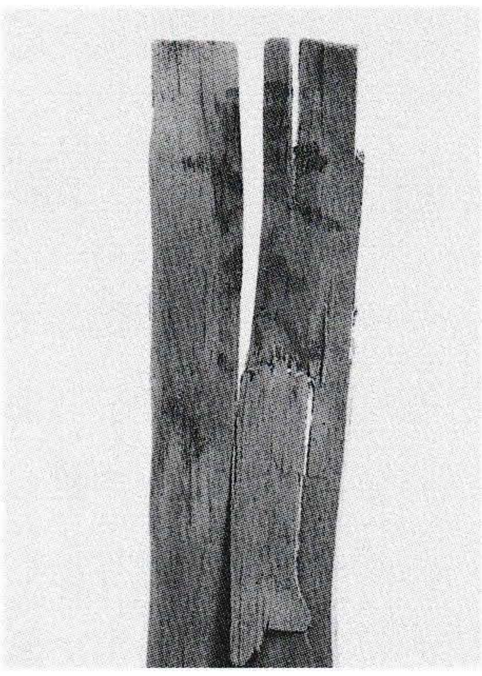


恒川清水と木製品

恒川清水のまわりには役人たちの住まいがあり、清水は彼らの生活になくてはならない湧き水でした。この清水の東側からは、５世紀後半から７世紀にかけての、木でできたたくさんの道具や製品（工具・農具・容器・楽器・祭祀具・建築材など）とともに、「長□」（□は読めない字）の文字が書かれた唯一の木簡が発掘されています。

木製品出土状況

木簡はうすく割った細長い木の板に墨で文字が書かれたもので、役所の間で連絡用に使ったもの、役所で帳簿として使ったもの、荷札として荷に付けたもの、字を書く練習をしたものなどがあります。



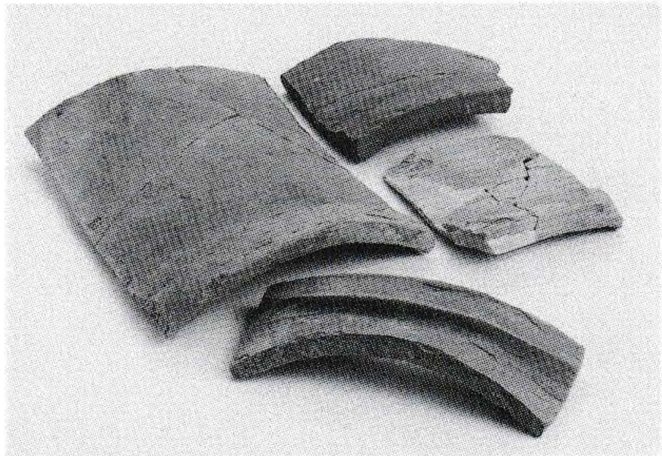
恒川遺跡群出土の木簡

郡衙と瓦

古代には瓦は貴重で、屋根を瓦でふいた建物は郡衙の政庁や郡衙に付属した寺などにかぎられていました。恒川遺跡群では、正倉のまわりをとりかこむ溝から瓦が出土しています。

恒川遺跡群の北西約500mにある金井原瓦窯跡は、８世紀中ごろの窯と考えられています。金井原瓦窯の製品と恒川遺跡群出土の瓦は特徴が異なるもので、群衙の瓦を焼いた窯は別にあったようです。

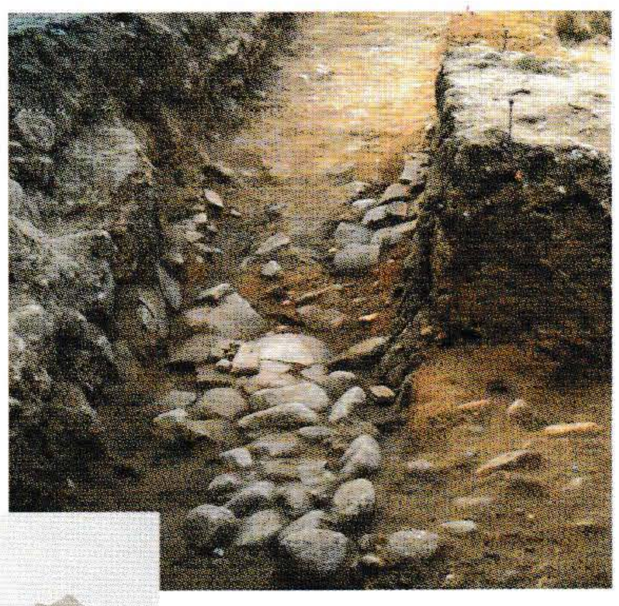
恒川遺跡群の軒丸瓦



恒川遺跡群の平瓦

豆知識　金井原瓦窯跡

1953年（昭和28年）に発掘され、上野の配水池建設の時にふたたび発掘されています。半地下無段式窖窯とよばれる構造をもつ瓦を焼いた窯で、三河地方と強い共通性があります。



金井原瓦窯跡と
その出土品

都との結びつき

古代には、地方から都へさまざまな特産品が献上されていましたが、伊奈評（伊那郡の古い呼び名）からは都に干した鹿肉をみつぎ物として献上していたことが、当時の都であった藤原京から見つかった木簡からわかっています。

また、奈良時代の伊那郡の長官、金刺舎人八麻呂は孝謙上皇につかえ藤原仲麻呂の乱（764年）をしずめるのにてがらをたてました。

古墳時代には馬などを通して大和王権と密接に結びついていた飯田下伊那ですが、古代伊那郡衙の一画、高岡の新屋敷遺跡では、柵の横で見つかった区画のための溝（奈良時代）内から馬の骨が見つかっています。また、金刺舎人八麻呂は信濃の国牧の責任者でもありました。このように、奈良時代においても「馬」で中央と深い関係があったことをうかがうことができます。

（馬場保之）